

両親との情緒的関係が青年期の攻撃性に与える影響 —自己愛・自尊心を仲介に—

永森 悠紀¹ 西村 昭徳²

本研究では、攻撃性増大のプロセスを実証するために青年期にあたる大学生を調査対象とし、両親による不快体験の受容・理解が自尊感情の安定性と自己愛を仲介として攻撃性に影響を与える一連のプロセスを検証した。仮説として、両親に不快体験を受容してもらえたと感じると、自尊感情が安定し、自己愛傾向を抑制することで自他への攻撃性も抑制するのではないかというモデルを想定した。

結果としては、父親による情緒的反応への受容が評価過敏性に負のパスが見られたが、父親による身体的反応への受容・母親による情緒的反応への受容ならびに身体的反応への受容においては、誇大性・評価過敏性・自尊感情との間にパスは見られなかった。また、自己愛・自尊感情と攻撃性においては、誇大性と言語的攻撃に正のパス、自責感に負のパスが見られた。自己愛の評価過敏性側面と攻撃性では、短気・敵意・身体的攻撃・自責感・自己破壊行動に正のパスが見られた。

以上の結果から、本研究では、父親から受容されたと感じると、他者からの評価に対して過敏に反応することや、他者を攻撃したり自分を責めたりする行動が少なくなるということが明らかとなり、仮説で想定したモデルを部分的に支持することが示された。

キーワード：両親による不快体験の受容・自己愛・自尊感情・攻撃性

問題と目的

子どもの学校生活において、いじめや校内暴力、不登校などといったことが問題視されている。文部科学省の児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(2014)において、小・中・高等学校における暴力行為・いじめ・不登校の数には若干の減少がみられるが、依然としてその数は多い。そういった子どもの問題行動の背景の1つに子どもの攻撃性があげられる。さらに、大学生になってもその攻撃性を維持したままといった傾向も見られ、大学生を対象とする攻撃性の研究も目立っている。

攻撃とは、「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義されている(大淵1993)。また、Russell(2005)は攻撃を「他者が逃れたい、避けたいと思っているような不快刺激を、その人を傷つけ、損害をもたらすことを期待して加えることである」と定義している。さらに、攻撃性が向けられる方向・対象は、他者や物といった外界の対象ばかりでなく自分自身にも向けられ(松木1996)、自責感や抑うつ感に加え、思い描く理想のズレや自分自身の至らなさ、不甲斐なさを感じることで生じる自己不全感や自己否定感、自己嫌悪などといった感情が中核となって自身のその

内側に向けられることがある(山崎2008)。以上のことから、本研究では、攻撃性を「他者もしくは自己が逃れたい、避けたいと思っているような不快刺激を、その人を傷つけ、損害をもたらすことを期待して加えること」と定義した。

こういった攻撃性に影響を与えると考えられる心理的特性として、自己愛と自尊感情があげられる。自己愛・自尊感情と攻撃性との関係はこれまで様々な研究が行われてきた。自己愛に関しての研究は非常に多く行われており、定義は研究者によって様々である。

Raskin, Novacek, & Hogan (1991) は自己愛とは主に他者に対して優越性や有能性を顕示・誇張することで防衛的に維持される自己への肯定的評価と定義している。また、中山・中谷(2006)は自己愛を「自己評価・自己価値の維持機能」と定義している。本研究ではこれらの定義を用いる。

さらに、自己愛は「周囲を気にかけない誇大型」と「過剰に気にかける過敏型」の2つのタイプがあるとされ(Gabbard, 1989)、近年では一般青年を対象に、過敏性自己愛傾向に関する研究が多く実施されており(松並 2014)、2つの視点をもって研究がなされているのが現状である(谷 2007)。

そうした自己愛と攻撃性の研究において、福島(2007)によると、攻撃的な人間は自分自身を過度に好意的に評価しており、他人によってそれが侵害されると攻撃的になり、これによって自己愛傾向が高い方

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

が、攻撃性が高くなると述べている。また、非現実的な高い自己評価を持っているものに関しては、他者からの批判に対して敏感に反応するという点から、他者を敵意的に見やすく、不快な情動を感じやすいと考えられている（遠田2011）。

自尊心とは、「優越感や有能性の有無に関わらず自己に対する受容的で肯定的な評価が含まれる概念」と定義されている。自尊心と攻撃性との関連について、先行研究において、自尊心が高い者ほど攻撃性が低いという負の関連があることが示されている（松原・藤生2005）。

しかし、近年では自尊心の高低のみが問題行動に影響を与えるのではなく、自尊感情の安定さが原因であるように考えられており（松原・藤生 2005）、自尊感情が高くても不安的であると敵意や怒りを感じやすいことも報告されている。

そうした自尊感情の安定性・変動性を意味する概念として自己価値の随伴性があげられる（e.g., Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette, 2003）。この自己価値の随伴性は自己に対する評価に影響を与える領域において出来事が生じた際の自尊感情の変化のしやすさを捉えており、本研究ではこの自己価値の随伴性の概念を用いた。

自己愛と自尊感情はともに自己に対する肯定的な評価を意味するが、いくつかの点で異なっている。自尊感情が心理的適応の指標として用いられるのに対して自己愛は病理的内容も含んでいる。また自尊感情が自己の価値と能力の感覚という、比較的正確な自己認知を前提とした自己肯定感であるのに対し、自己愛は自己に対する誇大な感覚という、やや現実から乖離した評価を意味する（小塩1998）。

そして、攻撃性と自己愛・自尊感情に影響を与えるものとして、親子関係がある。

親の養育態度と攻撃性について、笠井・岡田（2009）は、親から愛されることなく拒否的な態度で養育されてきた子どもは、成長してからも自分は誰も愛されていないと感じ自己否定的な感情を持つとともに、そのことに怒りを感じやすくなる。そして、その怒りを親に対してだけでなく、その他の他者に対しても向けやすくなるのだと述べている。また、大河原（2013）は子どもの問題行動の根底には、感情制御の発達不全があることを指摘している。子どもの感情表現は子どもと他者とのコミュニケーションにおいて、子どもの感情がどのように扱われてきたかが関係しており、否定的に扱われていた場合は、抱いた感情は抑圧され、適切な感情の表現を身につけることができないため、その抑圧されてきた感情が制御できなくなった時には、攻撃行動として表出されると考えられている。また、自尊心と親子関係について、小玉（2010）は親の自己認知と無関係に、子どもが親の養育をどのように捉え

ているかが子どもの自尊感情に影響を及ぼすということを示しており、柴山・新井（2004）は親から一個人として認められる経験をするのが自己を価値ある者として受け入れることに結びつくだろうと述べている。そして、宮下（1991）は自己愛と親子関係の関連について、男子においては父親の支配・介入というある種の否定的な態度が自己愛を高くし、女子においては母親の感情的で情緒不安定な態度が自己愛を高くしていると述べている。そうした先行研究から、両親との関わりや受容体験は青年期の攻撃性や心理的特性に大きな影響を与えていることが示唆されている。

そこで本研究では、攻撃性増大のプロセスを実証するために青年期にあたる大学生を調査対象とし、両親による不快体験の受容・理解が自尊感情の安定性と自己愛を仲介として攻撃性に影響を与える一連のプロセスを検証し、介入の視点を見出すことを目的とした。

方 法

1. 調査対象者

関東圏内の大学に通う大学生323名を対象とした。そのうち、データに不備のない258名（男子 134名 女子122名）を分析対象とした。

2. 調査内容

(1)安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井（1999）日本語版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）：攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」と「言語的攻撃」、情動的側面である「短気」、認知的側面である「敵意」の4特性を測定する下位尺度から構成されている。本研究では、下位4尺度から、それぞれ因子負荷量が高いものを3項目ずつ、合計12項目を使用した。回答は、「非常に当てはまる（5点）」から「全く当てはまらない（1点）」の5件法であった。

(2)安立（2001）の攻撃性質問紙：12項目を使用した。「積極的行動」9項目、「対象攻撃行動」8項目、「猜疑心」4項目、「自己破壊的行動」5項目、「自責感」7項目で構成されている。本研究では、そのうちの「自己破壊的行動」「自責感」を用いた。回答は、「非常に当てはまる（5点）」から「全く当てはまらない（1点）」の5件法であった。

(3)両親による不快体験の受容・理解尺度：大河原（2013）の「負情動・身体感覚否定経験認識質問紙」を元にして新たに作成した質問紙を使用する。両親とのやりとりを13場面想定し、各場面において、両親はどの程度理解してくれたかどうかを「理解してくれる（5点）」から「全く理解してくれない（1点）」の5件法で回答を求めた。母親、父親それぞれとの関係について回答を求め、なかった場合は想定で回答すること、

父(母)どちらかのみと過ごしていた方に関しては該当する箇所のみを答えるよう説明した。

(4)Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette (2003)の自己価値の随伴性尺度:この質問紙では、7領域(他者からの支持・学力・外的魅力・道徳・家族の支え・競争・宗教)を想定している。本研究では 宗教領域以外の6領域35項目を使用した。回答は、「非常に当てはまる(5点)」から「全く当てはまらない(1点)」の5件法であった。

(5)中山・中谷(2006)の評価過敏性-誇大性自己愛尺度:自己愛の過敏的側面である「評価過敏性」(8項目)と誇大的側面である「誇大性(10項目)」の2因子全18項目で構成される質問紙を使用した。回答は、「非常に当てはまる(5点)」から「全く当てはまらない(1点)」の5件法であった。

3. 手続き

大学の授業内に質問紙調査を行った。実施の前に「両親による不快体験の受容・理解」の質問紙項目について説明した上で実施した。実施においては、回答者個人が特定されない旨を伝え、承認を得た者に対してのみ実施した。

4. 仮説モデル

本研究の仮説モデルをFigure1に示した。

先行研究を踏まえて、両親の情緒的な受容は、自尊感情が変動しやすい性質である自己価値の随伴性及び、過敏性・誇大性といった自己愛傾向を弱めて攻撃性を抑制するという仮説を立てた。



Figure1 仮説モデル

注1. 実績は正のパスを、破線は負のパスを示す。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮については、所属機関の倫理審査で承認を得た。

結 果

1. 両親による不快体験の受容・理解尺度の因子分析

青年・女子青年の認知した父親及び母親の受容を表す項目で分析の偏りがあった2項目を除く11項目で因

子分析(最尤法, プロマックス回転)を行い, 固定値の減退率に基づき, 父親・母親共に2因子を採用した(Table 1)。

Table1 両親による不快体験の受容・理解尺度の因子分析(最尤法, プロマックス回転)

項目	父親				母親			
	1	2	3	4	1	2	3	4
第一因子: 不快体験の受容・理解								
1. 私が不快体験の時に、両親は理解してくる	0.71	0.00	0.00	0.00	0.68	-0.00	0.00	0.00
2. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.70	0.00	0.00	0.00	0.68	0.00	0.00	0.00
3. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.61	0.00	0.00	0.00	0.68	0.00	0.00	0.00
4. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.57	0.00	0.00	0.00	0.62	0.00	0.00	0.00
5. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.57	0.00	0.00	0.00	0.51	0.00	0.00	0.00
第二因子: 不快体験の受容・理解								
6. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	-0.00	0.70	0.00	0.00	-0.00	0.69	0.00	0.00
7. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	-0.00	0.69	0.00	0.00	-0.00	0.63	0.00	0.00
8. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.00	0.69	0.00	0.00	0.00	0.63	0.00	0.00
9. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.00	0.69	0.00	0.00	0.00	0.63	0.00	0.00
10. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.00	0.69	0.00	0.00	0.00	0.63	0.00	0.00
11. 私が不快体験の時に、両親は話を聞いてくれる	0.00	0.69	0.00	0.00	0.00	0.63	0.00	0.00

第1因子は、「私がお腹にぐずぐずしその理由を説明した時」などの5項目がまとまり、「不情動体験の受容・理解」因子と命名した。第2因子は、「私がお腹の調子が悪く「お腹が痛い」と言った時」などの6項目がまとまり、「身体感覚の受容・理解」因子と命名した。信頼性係数を算出したところ、父親は、 $\alpha = .95 \cdot 90$, 母親は、 $\alpha = .93 \cdot 87$ といずれも十分な値を示した。

さらに、父・母の各受容尺度得点を比較するため、対応のあるt検定を行った結果、有意な差は見られなかった(Table 2)。

Table2 父親・母親の「各受容尺度」得点の比較

得点	父親		母親		t値
	平均(M)	標準偏差(SD)	平均(M)	標準偏差(SD)	
情緒的反応への受容	16.29(4.95)		11.96(4.99)		-4.805
身体的反応への受容	22.51(5.20)		23.84(4.99)		-2.899

*p<.05, **p<.01
()内はM, SDを示す。

2. 基礎統計量

本研究で使用した尺度の下位分類における各変数の平均値と標準偏差, 最大値, 最小値, α 係数をTable 3に示した。いずれの尺度も概ね許容できる内部一貫性を示しており, 本研究で使用する測度として適正であった。

3. 各変数間の相関

3-1 全体における不快体験の受容と自己愛・自己価値の随伴性・攻撃性との関連

被験者全体における各尺度の相関係数をTable4に示した。父親による情緒的反応への受容が評価過敏性との間に1%水準で弱い負の相関が見られたが ($r = -.212$), 誇大性 ($r = .093$)・自己価値の随伴性 ($r = -.044$)ならびに攻撃性とはほぼ無相関であった。さらには、父親による身体的反応への受容及び母親による情緒的・身体的反応への受容も、攻撃性・自己愛・自己価値の随伴性とはほぼ無相関であった。

Table3 使用尺度の基礎統計量

尺度	平均値	SD	最小値	最大値	n
攻撃性尺度					745
短気 A(15)	8.23	2.86	3.00	15.00	745
敵意 A(15)	19.00	3.75	3.00	15.00	860
身体的攻撃 A(15)	7.89	1.89	3.00	15.00	741
言語的攻撃 A(15)	9.09	2.42	3.00	15.00	849
自己攻撃性尺度					
自責感 A(15)	25.42	5.11	7.00	35.00	811
自己破壊的行動 A(15)	11.08	4.82	3.00	25.00	782
自己愛尺度					
評価過感性 A(15)	22.14	3.56	8.00	35.00	812
誇大性 A(15)	22.17	3.71	15.00	44.00	802
自己感情の情緒性尺度					
短気 A(15)	24.22	6.49	14.30	55.00	805
敵意 A(15)	24.38	4.82	8.00	28.00	728
短気 A(15)	22.18	3.24	13.00	35.00	802
無関心志向					
不愉快体験の受容-情緒性					
父-情緒的反応の受容 A(15)	18.22	4.91	3.00	25.00	848
母-情緒的反応の受容 A(15)	22.55	5.28	3.00	30.00	862
母-情緒的反応の受容 A(15)	17.92	4.84	3.00	25.00	839
母-情緒的反応の受容 A(15)	23.65	4.82	3.00	30.00	814

Table4 各変数の相関係数の結果 (全体)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
攻撃性														
1.短気	-.48*	-.11*	-.42*	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
2.敵意	-.11*	-.42*	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
3.身体的攻撃	-.42*	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
4.言語的攻撃	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
5.自責感	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
6.自己破壊的行動	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
7.自己愛	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
8.自己破壊的行動	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
9.自己愛過感性	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
10.誇大性	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
11.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
12.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
13.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
14.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13

3-2 全体における自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性との関連

自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性との相関は、評価過感性と短気 (r=.481)・敵意 (r=.487)・自責感 (r=.612)・自己破壊的攻撃 (r=.513) との間に1%水準で中程度の正の相関が、身体的攻撃との間には1%水準で弱い相関が見られた (r=.260)。誇大性と言語的攻撃との間には1%水準で弱い正の相関が (r=.384)、敵意 (r=-.209)・自責感 (r=-.284) との間には1%水準で弱い負の相関が見られた。自己価値の随伴性においては、短気 (r=.304)・敵意 (r=.205)・自責感 (r=.311)・自己破壊的行動 (r=.271) との間に1%水準で弱い正の相関が見られた。また、自己愛と自己価値の随伴性の関係において、自己価値の随伴性と評価過感性との間に1%水準中程度の正の相関が見られた (r=.550)。

さらには、男女別の各尺度の相関係数も算出し、Table5に示した。

Table5 各変数の相関係数の結果 (男女別)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
攻撃性														
1.短気	-.48*	-.11*	-.42*	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
2.敵意	-.11*	-.42*	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
3.身体的攻撃	-.42*	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
4.言語的攻撃	-.41*	-.37*	-.27*	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
5.自責感	-.16*	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
6.自己破壊的行動	-.12*	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
7.自己愛	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
8.自己破壊的行動	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
9.自己愛過感性	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
10.誇大性	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
11.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
12.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
13.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13
14.情緒的反応の受容	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13	-.13

3-3 男子における不快体験の受容と自己愛・自己価値の随伴性・攻撃性との関連

男子において、両親による不快体験の受容と攻撃性の各因子・自己価値の随伴性との間には、唯一、父親による情緒的反応への受容が誇大性と5%水準で弱い正の相関が見られたが (r=.206)、その他の変数とは無相関であった。

3-4 男子における自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性との関連

自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性との相関は評価過感性と短気 (r=.517)・敵意 (r=.453)・自責感 (r=.645)・自己破壊的行動 (r=.591) との間において1%水準で中程度の正の相関が、身体的攻撃 (r=.231) との間に弱い正の相関が見られた。誇大性は、言語的攻撃 (r=.320) との間に1%水準で弱い正の相関が、自責感との間に1%水準で弱い負の相関が (r=-.310)、敵意との間に5%水準で弱い負の相関が見られた (r=-.209)。自己価値の随伴性は、短気 (r=.385)・敵意 (r=.238)・自責感 (r=.381)・自己破壊的行動 (r=.381) との間に1%水準で弱い正の相関が見られた。さらに、自尊感情と自己愛の関連において、評価過感性と自己価値の随伴性との間に1%水準で中程度の正の相関が見られた (r=.606)。

3-5 女子における不快体験の受容と自己愛・自己価値の随伴性・攻撃性との関連

女子において、父親による情緒的反応への受容が短気 (r=-.256)・敵意 (r=-.261)・身体的攻撃 (r=-.312)・評価過感性 (r=-.335)・自己破壊的行動 (r=-.272) との間に1%水準で弱い負の相関が見られた。さらに、父親による身体的反応への受容と短気 (r=-.285)・身体的攻撃 (r=-.216)・評価過感性 (r=-.307) との間に1%水準で、敵意 (r=-.216)・自己破壊的行動 (r=-.229) との間に5%水準で弱い負の相関が見られた。母親による情緒的反応への受容と攻撃性・自己愛・自己価値の随伴性との間には相関は見られず、母親による身体的反応への受容においては、評価過感性 (r=-.292) との間に1%水準で、身体的攻撃 (r=-.219) との間に5%

水準で弱い負の相関が見られた。

3-6 女子における自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性との関連

攻撃性と自己愛・自尊感情においては、評価過敏性と短気 ($r=.446$)・敵意 ($r=.556$)・自責感 ($r=.570$)・自己破壊的行動 ($r=.438$) との間に1%水準で中程度の正の相関が、身体的攻撃 ($r=.394$) との間に弱い正の相関が見られた。誇大性においては、言語的攻撃 ($r=.425$) との間に1%水準で中程度の正の相関が、自責感 ($r=-.241$) との間に1%水準で弱い負の相関が見られた。自己価値の随伴性は、言語的攻撃 ($r=.240$) との間に1%水準で、短気 ($r=.230$)・敵意 ($r=.227$)・自責感 ($r=.226$) との間に5%水準で弱い正の相関が見られた。また、自己価値の随伴性と自己愛の関連においては、自己価値の随伴性と評価過敏性 ($r=.485$)・誇大性 ($r=.315$) との間に、1%水準で中程度あるいは弱い正の相関関係にあった。

4. 両親による不快体験の受容・理解と自己愛・自己価値の随伴性及び攻撃性に対する影響の分析

両親による不快体験の受容・理解が自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性に及ぼす影響(仮説モデル(Figure1))を検討するために構造方程式モデリングによるパス解析を行った。なお、両親による不快体験の受容・理解、自己愛・自己価値の随伴性、攻撃性の各尺度間には中程度の相関係数が示されたため、共分散を仮定した上でモデルの適合度を検討した。モデルは、全体と男女別の計3パターンを検討し(Figure2, 3)、モデルの評価としては、適合度指標(GFI, AGFI, RMR, RMSEA) 情報量基準(AIC)を指標とした。

得られたモデルは、Figure2, Figure3に示した。全体のモデルにおいて、適合度指標はGFI=.945, AGFI=.890, RMR=2.925, RMSEA=.051, AIC=392.617となり、データはモデルへの十分な当てはまりを示した。

Figure2の結果から、全体のパス係数においては、本研究の中核である両親による不快体験の受容・理解と自己愛と自己価値の随伴性との間において、父親による情緒的反応への受容が評価過敏性に負のパスが見られたが、父親による身体的反応への受容・母親による情緒的反応への受容ならびに身体的反応への受容においては、誇大性・評価過敏性・自己価値の随伴性との間にパスは見られなかった。

自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性においては、誇大性と言語的攻撃に正のパス、自責感に負のパスが見られた。自己愛の評価過敏性側面と攻撃性では、短気・敵意・身体的攻撃・自責感・自己破壊行動に正のパスが見られた。自己価値の随伴性と攻撃性においては、どの変数間にもパスは見られなかった。

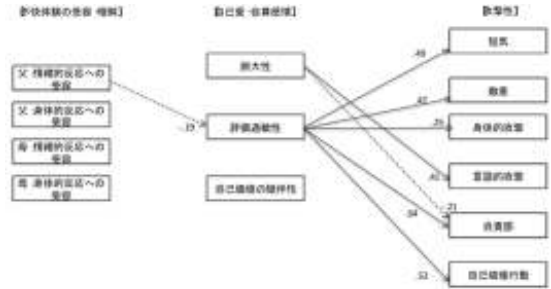


Figure2 パス解析の結果

注1. 誤差変数及び共分散についての表示は省略した。
注2. 実線は正のパスを、破線は負のパスを示す。

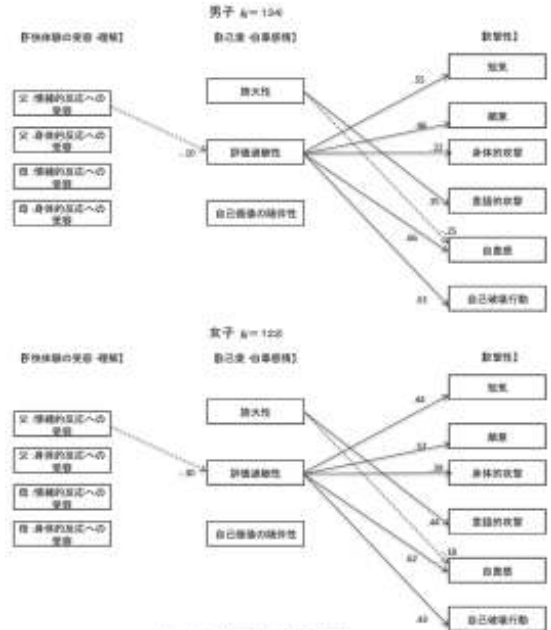


Figure3 男女別によるパス解析の結果

注1. 誤差変数及び共分散についての表示は省略した。
注2. 実線は正のパスを、破線は負のパスを示す。

また、男女別のパス解析において、モデルの構造は男女ともに同一の構造に対してデータの当てはまりの良さを示された。適合度は、GFI=.911, AGFI=.845, RMR=3.641, RMSEA=.049, AIC=320.068であった。男子における父親による情緒的反応への受容と評価過敏性とのパスの標準化係数は有意ではなく、女子における父親による情緒的反応への受容と評価過敏性とのパスの標準化係数は有意であった。そのため、男子と女子の標準化係数に差があるかを検討するため、一対のパラメータ比較を行ったところ、いずれのパスにおいて、男女間で標準化係数の有意差は見られなかった。

考 察

本研究の目的は、両親による不快体験の受容と攻撃性との関連を自己愛と自尊感情を仲介として仮説モデ

ルを検証することであった。仮説においては、両親による不快体験の受容・理解が自己価値の随伴性・自己愛傾向を低くすることで、攻撃性も減少するのではないかとという仮説を立てた。

しかし、結果としては、自己愛・自己価値の随伴性に関連がみられた両親による不快体験の受容は「父親の情緒的反応への受容」のみで、それも自己愛の「評価過敏性」と負のパスが見られただけであった。「評価過敏性」は攻撃性の短気・敵意・身体的攻撃・自責感・自己破壊的行動と正の相関があり、全体では「父親の情緒的反応への受容」は「攻撃性」のどの下位因子とも相関が見られなかったため、父親から受容されたと感じると、他者からの評価に対して過敏に反応する傾向が軽減され、他者を攻撃したり自分を責めたりする行動が少なくなるとということが考えられる。母親による受容に関しては、自己愛・自尊感情のどの因子にも関連が示されなかった。さらには、攻撃性との関連においては、どの受容因子も攻撃性との関連は見られなかった。

男女別に検討すると、男子よりも女子の方が父に対して情緒的な反応をし、父親に受け止めてもらえたと感じると、他者の評価が気にならなくなるということが明らかになった。先行研究では、小西 (2009) は女性において父親の愛情豊かで甘やかしがちな養育態度は青年期の自己愛人格傾向の高さと関連していると述べている。本研究では子の親との関わりにおいて不快体験を「理解してくれたかどうか」について焦点を当てた。このことは、子どもを甘やかすのではなく一個人として認めるということであり、家庭の中で権限がある父親から受け止められるということで、自分自身に対しての自信となり、他者の評価に過敏にならず、他者や自己に対しての攻撃性も抑制されるのではないかと考えられる。

女子における父親による情緒的反応への受容と評価過敏性とのパスの標準化係数は有意であり、男子は有意でなかったが、女子の方が男子よりも周囲との関係性が自己を規定する上で重要な役割を持ち、周囲との関係性を重視するために対人関係において周囲に気を配る傾向が高いと考えられているため (金子 2000)、女子では父親による受容が評価過敏と有意になったのではないかと考えられる。

女子においては、父親による受容と攻撃性との間にも関連が見られたが、この結果は、先行研究において、笠井 (2009) が述べた「女子において、拒絶的な養育行動と情緒的な温かみの乏しさは自責感を除く攻撃傾向に強い影響を与える」ということを支持するものとなった。

自己愛・自己価値の随伴性と攻撃性との関連において、自己価値の随伴性と攻撃性の各下位因子とは関連は見られず、自己愛と攻撃性では、誇大性が高くなる

と言語的攻撃が増え、自分を責める傾向が低くなることが示された。また、評価過敏性が高くなると自傷行為や自分を責めやすくなり、自分に対してだけでなく、外界に対しても攻撃する傾向が高くなるということが示された。自己愛の誇大性の側面は自責感を低めるというポジティブな現象が見られるが、評価過敏性においては、言語的攻撃以外のすべての攻撃性を高めるという結果となった。従来の自己愛研究において、自己愛の過敏性な性質は、失敗体験をした際、その出来事に対して内的帰属をすることから抑うつを感じやすくなるとされている (羽川 2009)。そのため、親から受け止められるというある種の成功体験をすることによって評価過敏性傾向が弱まり、抑うつ感やその他のネガティブな感情を抱かなくなり、攻撃傾向も低くなるのではないかと考えられる。

自尊感情が変動する性質である自己価値の随伴性は、両親による不快体験の受容と攻撃性のいずれの下位因子とも有意なパスは見られなかった。そのため、両親による不快体験の受容と攻撃性との間においては、自尊感情の変動性は関連がないということが示された。しかし、自尊感情の変動性と他の各変数との相関を調べた際、自己愛の評価過敏性の因子と中程度の相関が示された。自尊感情の変動性の測定に用いた尺度は、自己に対する評価に影響を与える領域において出来事が生じた際に自尊感情がどのくらい変化するかどうかを捉える尺度であり、他者が自分に行う評価が気になってしまう自己愛の過敏性のタイプと自尊感情の変動性に関連が見られたのは妥当な結果であると思われる。このことから、自尊感情の変動性というのは、自己愛の評価過敏性の側面と関連があることが考えられるため、自己愛と同じ仲介的な概念でとらえるのではなく、異なる位置づけで検討する必要があると考えられる。また、自尊感情の変動性が自己愛傾向と影響が見られたように、自尊感情の変動性は両親からの受容・攻撃性と直接的に関連をしているのではなく、違う概念や傾向が仲介として働いている可能性があると考えられる。さらに、先行研究において、川村 (2014) は自尊感情が不安定なものは、低下した自尊感情の回復行動として八つ当たり攻撃のような不適切な対処行動を行いやすいと述べている。本研究では、攻撃性を直接なものと捉えているため、怒りや攻撃の置き換え行動といった概念で捉える必要もあるかと思われる。

自己価値の随伴性尺度では、ある領域においての自尊感情の変動性を捉えている。この領域には家族の支えという領域もあるが、「自分が親友 (恋人) から好かれていないと感じると、私の自己評価は低くなる」というような項目もあるように他者からの支持や学力、外的魅力といった領域も想定している。そのため、自分自身の評価においてどの環境や領域に重点を置いているのかは個々で異なり、自分の外見や学力を基準

にして自己価値を認識する人においては、例え両親から不快体験を受容してもらったと感じても、学力や外見が変わるわけではないため、自尊感情の変動性に影響を与えなかったのではないかと思われる。そのため、自尊感情の変動性を領域ごとに分けて両親による不快体験の受容や攻撃性との関連を検討する必要があると考えられる。

今後の課題

本研究では、自己愛と自尊心を同じ次元で捉えていたが、自己愛と自尊感情に相関が見られたことから、違う次元として捉える必要があるのではないかと考えられる。また、両親による不快体験の受容の質問紙において受容体験を回想的に調査したが、大学の被験者に対して小学校の頃の記憶を想起させ回答してもらうということには方法論として限界があり、小学生や中学生のようにリアルタイムな親子関係を測定し、調査する必要があると考えられる。

また、自己愛・自尊感情と攻撃性についての関連では、誇大性の自己愛は言語的な攻撃とは正の関連が見られたが、自責感との間には負の相関が見られた。先行研究にもあるように仮説において、自己愛は攻撃性を高めると考えたが、自己愛と攻撃性の間の仲介となる概念を想定することが必要であると考えられる。自尊感情においては、高低ではなく変動性のみで攻撃性との関連を調査したが、変動性だけではなく変動性と高低という2軸で考える必要があるのかもしれない。

引用文献

安立 奈歩 (2001). 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 475-485.

安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.

大河原 美以 (2013). 母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成－因子妥当性と信頼性の検証－ 東京学芸大学紀要総合教育学系 I, 64, 163-169.

大瀨 憲一 (1993). 人を傷つける心－攻撃性の社会心理学－, サイエンス社

Gabbard, G.O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of Menninger Clinic*, 53, 527-532

川村 遼・戸田 弘二 (2014). 大学生における自尊感情の変動性と攻撃との関連 北海道教育大学紀要教育科学編, 65 (1), 449-464.

金子 一史 (2000). 青年期心性としての自己関係づけ, 教育心理学研究, 48, 43-48.

Crocker, J., Luhtanen, R. K., Cooper, M. L., & Bouvrette, A. (2003). Contingencies of self-worth in college students: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 894-908.

小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情・友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, 46, 280-290

小玉 陽士 (2010). 親の養育スキルが子どもの自尊感情に及ぼす影響－子どもの認知に焦点を当てて 日本教育心理学会総会発表論文集, 52, 321.

小西 瑞穂 (2009). 自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連 東海学院大学紀要, 3, 125-127.

笠井 達夫・岡田 涼子 (2009). 親の養育態度と青年の攻撃性との関係 徳島文理大学研究紀要, 78, 95-108.

柴山 直・新井 真由美 (2004). 青年期における性別役割感と自尊心との関連－両親の養育態度への認識内容からの検討－ 新潟大学教育人間科学部紀要, 7 (1), 15-27.

谷 冬彦 (2007). 人格心理学領域における研究動向と展望 教育心理学年報, 46, 72-80.

遠田 諭 (2011). フラストレーション場面における自己愛と言語表出の関係 埼玉学園大学紀要人間学部篇, 11, 89-100.

中山 留美子・中谷 素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.

羽川 可奈子 (2009). 女子青年における自己愛傾向と抑うつとの関連について－原因帰属の観点から－ 日本パーソナリティ心理学会第18回大会発表論文集, 84-85.

福島 さおり (2007). 攻撃性と自己愛傾向の関連性について 臨床教育心理学研究, 33, 1.

松木 邦裕 (1996). 対象関係論を学ぶ－クライン派精神分析入門－ 岩崎学術出版会

松並 知子 (2014). 自己愛の病理性の性差－他者への依存と自己誇大化－ パーソナリティ研究, 22 (3), 239-251.

松原 弘泰・藤生 英行 (2005). 中学生における自尊感情の不安定さと攻撃性・うつとの関係 上越教育大学心理教育相談研究 4, 25-38.

文部科学省 (2014). 平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/09/1362012.htm

山崎 俊介 (2008). 青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連 九州大学心理学研究, 9, 143-151.

Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. (1991).

Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, 59, 19-38.
Russell G. Geen. 神田信彦・酒井久実代・杉山成 (訳)

(2005). *なぜ攻撃してしまうのか—人間の攻撃性—* プレーン出版

—2016.1.30受稿, 2016.3.12受理—

The influence by which the relation with a feeling exchange with parents gives in it to aggression in adolescents: Narcissism and self-esteem in agency

Yuki NAGAMORI (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Akinori NISHIMURA (*Tokyo Seitoku University*)

The present study surveyed adolescent college students in order to demonstrate the process of increasing aggressiveness. It investigated whether accepting and understanding unpleasant experiences with parents affected the aggressiveness stability, and whether self-love/self-esteem is an intermediary in the process.

As a result, receptivity to the emotional reaction by the father was seen as a negative path in the evaluation of hypersensitivity, from recipient to recipient. In addition, students' physical reaction to the emotional reaction of the receptor-mother to the physical reaction by the father the path between the hype of and evaluation irritable, self-esteem I had not seen.

In addition, in the evaluation of irritability and aggression and self-love, a positive path was seen in irritability, hostility and physical attack, and the ERA sense of self-destructive behavior.

From the above results, this study demonstrates that, with regard to the role of the father, the smaller the tendency to react sensitively to the evaluation from others, the less the likelihood of self-blame or attacking others. These results partially support the hypothetical model.

Key words: accepting and understanding unpleasant experiences with parents, narcissism, self-esteem, aggression

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2016, Vol. 16, pp. 62-69